

優秀修士論文概要

人格の生と事前指示

—— クヴァンテの人格概念を参考に ——

木 浪 凜太郎

人は認知症の進行などによって、自分に加えられる医療的処置を理解し、それについて熟慮し、決断する能力 (competence) を失うことがある。そして、そのような事態が予見される場合に、その際の処置を当人が予め書面などの形で指示しておくことを事前指示という。事前指示が自分の安楽死を指示することもあり、このような形での安楽死の実施が認められるべきかということが議論されてきた。本論文は、ミヒヤエル・クヴァンテの人格理解を参照し、事前指示に基づく安楽死の倫理的な正当化の道筋を示す。

1章では事前指示に基づく安楽死の倫理的諸問題を整理した。ドウォーキンが人生のインテグリティと、それを構成する「批判的利益」の保全を目的として事前指示の尊重を主張する。それに対してドレッサーは以前の有能 (competent) な患者と認知症の進行した無能力な患者の間に人格の同一性が成立しないという非同一性の推測と、認知症の進行に伴って利益が変化する可能性があるという利益の変化の推測という二点からドウォーキンに反駁する。後続の論者は非同一性の推測をドレッサーの中心的主張であるとする傾向にある。しかし、クヴァンテによると、心理的連続性の喪失のみによって全く別の人格になるという非同一性の推測は妥当ではない。したがって、事前指示の作成時点と実施時点で利益が変化する可能性があり、利益を損ないかねないという利益の変化の推測のほうが事前指示に対する反論として有効であり得る。このようにしてドウォーキンとドレッサーの2つの主要な対立点のうち、人格の利益が実質的な対立点として定位された。

2章では利益と選好という概念に注目した。ドウォーキンは批判的利益の追求に望ましい生を見出す一方で、ドレッサーは目下の状況への日々の適応の努力として生を説明しており、この相違が事前指示に対するスタンスに反映されている。私たちの利益と選好の形成はどのようなものであるかという問題は、本論文の二つの問題領域、つまり事前指示の正当性への問いと人格の生の理解への問いの両方にとって重要である。また、両名の利益理解の対立は折衷によっては解決せず、カクチュウスキーによる共同体主義的な利益理解の導入を必要とすると示唆した。

3章では、クヴァンテの理論を議論に導入する準備として、クヴァンテの人格理解の基本的構造と、人格の社会的意味についての見解を紹介した。クヴァンテは人格の同一性の問題を、人格性の条件、人格の通時的統一、そしてパーソナリティの同一性という三つの根本問題に分割する。そのなかでも、パーソナリティの同一性は人格による評価的な自己理解およびその自己理解の伝記的な一貫性によって確保されている。具体的には、過去あるいは将来の自分との否定的あるいは肯定的な「～との同一化」という作業を通して、人格は自分の人格としての理想像に接近し、望まない像から遠ざかろうとする。この「～との同一化」によって人格は安定した、一貫性のあるパーソナリティを形成する。それゆえ、事前指示においてパーソナリティの同一性が最も重大な問題を提起する。そしてパーソナリティは自分がど

のような人格であるか、そしてありたいかという評価的自己理解であるがゆえに、人格の利益と深く結合する。

またクヴァンテは、人格の社会的意味について次のことを主張する。パーソナリティは社会的構成物であり、人格は先行資源として与えられる社会化との肯定的あるいは否定的な同一化を積み重ねてパーソナリティを形成する。言い換えれば、私たちは周囲の人々による特定の行為の賞賛や非難から「こうあるべき」といった評価的なメッセージを受け取っており、それを採用するかしないかという判断を通じてパーソナリティを形成する。したがって、人格は社会化に先だってパーソナリティを確立せよと求めるのは、人格の自律に対する過大要求である。このようにして社会化されたパーソナリティの理解を踏まえて、クヴァンテは人格と他者との関係について次のように主張する。安定したパーソナリティの保持は他者からの信頼獲得を可能にし、それによって共同体の分化・分業化を可能にする。そして自分のパーソナリティを他者に主張することによって、自分の行為とその背後にある利益を適切にパーソナリティへと基礎づけ、他者にとって理解可能な行為として提示することが可能になる。

以上のように、日常的に行われる、複数の人格が関係を結びながら行う諸営為では、パーソナリティの安定性と、パーソナリティの他者への主張が重要であるということが示された。クヴァンテのこの理解は、事前指示の正当化と人格の生の理解の構築の両方にとって重要な視点を提供する。

4章では、クヴァンテの人格理解を踏まえて、クヴァンテによる事前指示の正当化の論証を検討し、その不十分さを指摘するとともに、その解決としてカクチュウスキーの「存続する利益」概念の導入を提案した。クヴァンテは「～との同一化」に着目し、事前指示を作成して将来の安楽死を指示するとき、有能力な患者は将来の無能力な自分との明確に否定的な同一化を行なうと指摘する。そして、この否定的な同一化が事前指示の尊重の根拠となる。

クヴァンテの論証は、日常的に行われる諸利益の比較考量に基づく選択の延長線上に事前指示の作成を置いて捉えることで、一貫性のあるパーソナリティの形成という人格にとって基本的かつ重要な態度に事前指示の必要性を基礎づける。しかしクヴァンテは、日常的ケースにおいて諸利益の比較考量に基づく選択は尊重されているという事実から、追加の論拠を挙げることなく、パーソナリティへの気遣い、つまり自己理解が失われているという特殊な前提を持つ事前指示も尊重されるという主張へ移行しており、飛躍がある。

この飛躍を架橋すべく、カクチュウスキーの共同体主義的な人格理解と「存続する利益」概念を導入した。カクチュウスキーによると、人格のナラティブは個人の自己意識の流れに閉じ込められておらず、集団の心理的連続性によって誕生から死に至るまでの全体が一つのナラティブとして完成する。この理解をクヴァンテのパーソナリティ理解と接合すると、パーソナリティへの気遣いが存在する期間に形成されるパーソナリティと、パーソナリティへの気遣いが失われた期間において他者の承認や呼びかけ、語り、記憶といった働きかけで維持されるパーソナリティが、連続的に結合して一貫したパーソナリティを形成するという見解が導かれる。そうすると、「～との同一化」としての事前指示は、パーソナリティへの気遣いが失われた期間においても尊重に値するといえる。現在の無能力な患者も、有能力であった期間と連続的なパーソナリティを有しており、その一貫性を尊重することは有意義となる。

5章では、クヴァンテの人格理解から導き出される人格の生の理解を素描した。ドウォーキンとドレッサーにおいては利益追求の規模や仕方に言及することによって人格の生の理解が描き出されていたのに対して、クヴァンテにおいては、一貫性のある安定したパーソナリティを他者へ主張することと、

人格の生と事前指示

利益の変化が生じた際にそれをパーソナリティの変容として適切に語り直し、それを他者に対して表明することの二点が人格の生の開花にとって重要である。この人格の生の理解には二つの利点がある。

第一に、この理解においては利益追求の種類や投資規模、かける時間といった内容面の事柄は一切問われないから、日々を眼前の課題の対処に費やしている人も、大きな目標に向けて邁進している人も、それらの行為を適切にパーソナリティへと基礎づけるなら、同様に人格という地位に相応しい生を送っていると認められる。この意味で、クヴァンテの議論に基づく人格の生の理解はドウォーキンとドレッサーの対立が抱えていた「どのような利益の追求が望ましいか」という難問を回避する。第二に、第一の利点は事前指示について問う際にも有益である。どのような利益を追求しようと、事前指示の作成の支障とはならない。生涯をかけて特定の批判的利益を追求するような人にしか事前指示は真に必要とされないという印象は払拭される。

最後に、以上の人格の生の理解を踏まえて、人格の生を社会的および共同体主義的に理解したことで生じる課題を挙げて検討した。パーソナリティを社会的構成物として理解し、パーソナリティの形成に社会化が影響すると認めるなら、人格はいかにして社会的規範を否定的に評価するパーソナリティや利益を形成し得るかが問われなければならない。カクチュウスキーとクヴァンテの議論には十分な答えを見出せないため、本論文ではマッキンタイアの「伝統」概念を参照した。マッキンタイアは伝統を固定的な思考様式としてではなく、社会における諸善についての絶え間ない議論として把握する。さらに、個人によるその人にとっての善の探索はその人が生きる伝統の文脈の内部で行われる。この理解から、パーソナリティの形成が社会化の影響下にあることは、共同体の内部で利益が画一的になることや、利益追求が完全に社会の統制下に置かれることを必ずしも意味しない。むしろ、一方では諸人格の利益追求が議論を構成してコンフリクトを生じ、もって伝統を生きたものとして有機的に変更せしめ、もう一方では生きた伝統が別の諸人格のパーソナリティや利益の形成に影響するという利益と共同体の間での相互関係が示される。この意味で、共同体主義的な枠組みで理解された人格は、社会的規範を否定的に評価するような利益を保持し、社会的規範へ働きかけることができる。

本論文は以上の考察を通して、クヴァンテの人格についての理論をベースとして他者との関係のうちに人格の生の理解を構築し、事前指示に基づく安楽死の実施の倫理的な正当化の道筋を示した。

優秀修士論文概要

擬ディオニュシオス・アレオパギテースにおける「神の名」

寺 島 奈 那

本稿は、5世紀後半のシリアの修道士とされる擬ディオニュシオス・アレオパギテース（以下ディオニュシオス）の「神との合一」へと向かう思索を、新プラトン主義の理論を用いて分析するものである。特に、『神名論』における神の名の解明と肯定神学に注目し、肯定の段階性と神の名の関係を提示することを通じて、その必要性を示すのが本稿の目的である。

ディオニュシオスはキリスト教神秘主義の始祖として、また新プラトン主義をキリスト教世界に広めた人物としてよく知られている。しかしこの人物それ自体のことはほとんど明らかになっていないのが現状である。その著作である『ディオニュシオス文書』は、使徒パウロの説教によって回心したアレオパゴスのディオニュシオスの名で書かれたが、19世紀になって、5世紀の新プラトン主義者プロクロスへの依拠が判明したことにより、偽書であることが確定した。このような背景のもと20世紀まで「ディオニュシオスはキリスト教徒か新プラトン主義者か」という問題に取り組む研究が盛んであった。しかし、近年ではディオニュシオス自身の来歴や思想信条を明らかにする研究だけでなく、思想それ自体を整合的に解釈することを目的とした研究も盛んになっている。このような研究動向に従い、ディオニュシオスの思想を主に新プラトン主義的背景から理解し、神秘主義の理論化の試みとして読むのが本稿の方針である。本稿が特に注目するのは「神の名」と「肯定神学」の関係である。ディオニュシオスの神秘主義の特徴として、とりわけ注目されるのは「否定神学」であるが、ディオニュシオスは神との合一へのもう一方の道として、「肯定神学」を考えている。この二つの方法はそれぞれ『神秘神学』と『神名論』という著作で中心的に扱われ、二つで一つの思想体系を為しており、切り離して考えることはできない。加えて、否定神学を殊更に強調することは神への到達不可能性を強調することであり、最終的に、神への合一は人間の自発的な行為によっては全く不可能であるという結論に陥りかねない。そこで本稿の目的は、神との合一の達成のために、なぜ肯定神学が必要なのか、それはどのような営為なのかを構造的に提示することである。その中で、肯定神学の具体的な方法として、『神名論』で行われる「神の名の解明」に焦点を当て、神の名と肯定の関係性を示しながら、肯定神学の内容を明らかにした。

まず第1章では、議論の前提として、肯定と否定の弁証法の構造を示し、これらが鏡合わせの様を呈していることを確認した。神に対する肯定と否定は、新プラトン主義的な存在のヒエラルキーに従って行われ、肯定はこれを下降する仕方、否定は上昇する仕方で行われる。『神秘神学』において、否定的意味をもつ語として、欠如、除去、否定の三種類が使われており、これが否定の上昇の段階を示している。特に、除去は神に対する言明の否定を通じて人間知性の否定を示すのに対して、最終的な否定は言明の否定自体をも否定し、人間存在の否定にまで至る。これに対応して、肯定にも段階性がある。すなわち、肯定は人間存在の肯定に始まり、人間知性の肯定を経て神に対する言明の肯定が可能になる。この段階性の確認によって、最も神に近い位置にある肯定と否定は知性を越え、言葉で語り得る「神学」

を越えた営為であるという線引きが成された。

これを踏まえて、第2章ではディオニュシオスの「神の名」について、新プラトン主義の理論を援用しながら整理した。そこで示された特徴として注目すべきは、神の名は神の働きを開き示すものであり、かつ神の働きに対して名付けられるという点である。このゆえに、神の働きの結果として成った被造物から神の名が採られ、原因である神に対して名付けられることとなる。これが『神名論』で解明される神の名であり、本稿はこれを「内在的な神の名」を呼ぶこととした。しかしこの名は、発出の「働き」を表わすのみであり、神それ自体を表わす名ではない。ディオニュシオスはプロクロスの分有論を援用しながら、神の本質と神の働き、神の超越と神の内在を表わす二種類の名前を区別している。まずプロクロスの分有論について、一者の超越性を強調するために一者を「分有されないもの」とし、「分有するもの」の間に「分有されるもの」としてヘナデスという項を置き、これを神々とした。ディオニュシオスはこれを一神教的に改変し、神自身は分有されないが、神の働きは分有される、という形に修正した。このディオニュシオスの分有論は、神の統一と区分の関係を示す中で述べられる。つまり、神は発出において区分され、その発出する神の力は様々なものに分有される。しかしこの神の力は分有されない神自身において統一されている。このように、神の区分が発出による神の内在を示すのに対して、神の統一は、神の超越性への留まりを意味している。ディオニュシオスは、この神の統一も神の名前として言及しており、『神学概論』で述べられたとされるこの名は、神があらゆる属性を超越していること、神が超越的な否定であることを意味している。そこで本稿では、この名を「内在的な神の名」と対比して「超越的な神の名」と呼ぶこととした。

これらの議論を補強するために第3章で具体的に『神名論』で扱われる神の名「善」「存在」を取り上げた。まず「善」が第一の名となる理由を検討することで、神の名と発出の関係をより明瞭に提示した。善はあらゆる意味において万物の原因であり、存在のヒエラルキーの末端まで及ぶ。すなわち、万物のなかで善性を受け取らないものはなく、万物は自身に適した仕方これを分有し「善いもの」となる。そのため、我々は文字通り万物において、被造世界のすべてにおいて、神の善なる働きを認めることができる。この理由から「善」が肯定の基礎として第一の名として置かれると考えられる。次に「存在」という神名を取り上げ、「内在的な神の名」と「超越的な神の名」の具体例を確認した。存在者に存在を与えるものは「存在自体」と言われ、これに先立つすべてに普遍的な原因として「先存在者」が立てられる。この「〇〇自体」という表現は他の神名に関しても見られ、これは被造物から分有される神の力を表わす「内在的な神の名」である。対して「存在自体」の原因となる「先存在者」は、我々が直接分有したり理解したりすることは出来ないものであり、「超越的な神の名」ということができる。

第4章では神の名に対する行為として、讃美と祈りについて検討した。この中で、肯定の段階それぞれに対応する讃美や祈りがあることが示された。「内在的な神の名」の解明は肯定神学の中核を為すものであり、解明された神の名を我々は神に肯定すると同時に讃美しなければならない。この前提として、「超越的な神の名」に対する讃美によって、神に対する人間知性の到達可能性を肯定する必要がある。このように二種類の名をもって行われる讃美は、我々の自己変容をうながす。すなわち、讃美する主体と讃美する客体の間を媒介する神の名は、讃美という行為において、単なる神についての学問的知識ではなく、神に対して自己を捧げる媒介して機能する。しかし、讃美はあくまで主体と客体を必要とする行為であり、我々を神との合一に至らしめるものではない。そのため、否定の一番最後の段階として、そしてそれに鏡合わせに対応する形で肯定の一番最初の段階として「沈黙における祈り」が必要である。

祈りは、我々が神に現存するものとなるところから、神との合一に至るまで、神と我々の関わりすべてを包括する行為であり、その中で最初の沈黙による祈りは我々を神学へ入門するように導く役割を果たす。そのため、まず沈黙のまま祈り、神に対して自らの存在を肯定することが神との合一のための端緒になると考えられる。

以上の議論から、神との合一へを目指す道行きにおいて、あらゆる否定の前にはあらゆる肯定が必要であり、神の名を介した神の肯定だけでなく、神に向かう人間存在と人間知性の肯定も必要であることが示された。もちろん、この結論は神秘主義における否定の重要性を減ずるものではなく、肯定の優位性を説くものでもない。しかし、知性と存在の否定と超脱、すなわち脱我の結果として描かれる神との合一に関して、自身の存在の肯定と認識の肯定を経て、我々に可能な限り神を肯定することの必要性を説くことは、神秘主義における人間の主体性や能動性に光を当てることになるだろう。またこのことは、ディオニュシオス思想における「神の名の解明」の理解についても、新たな視座をもたらす。被造物から神の名が採られること、そしてその神の名を神に肯定し讃美することは、被造物たる人間の存在が神の名を表わし、神を讃美するものとなる可能性を示唆する。神に対して自身の存在を肯定し、知性認識の可能性を肯定することは、常に神が我々に現存し、我々を照明することによって可能になる。このように、自身の存在や知性が神から与えられたものであることを理解したうえで神の名の解明に臨むことは、その恩恵たる知性を十全に働かせ、真に神の名たり得るものとして振る舞うことを意味するとも言えよう。このような神の名としての人間の行為や、肯定を意味する行為の具体的な内容については、『教会位階論』や『天上位階論』を踏まえたより詳細な研究が必要である。しかし、新プラトン主義からの影響を踏まえ、神との合一を構造的に描き肯定の必要性を強調した本稿は、ディオニュシオスの神秘主義研究に対して、新たな、そして有効な視座を提供するものであると考えられる。